

体と心の性が一致せず苦悩する性同一性障害者(GID)。LGBTと呼ばれる性的少数者全体としては理解が広がっているが、中でも治療が必要なGIDには対応が進まない。GIDの当事者は何に悩むどんな対応を求めているのか。

新潟県に住む会社員の達也さん(仮名、39)は、長くとつて性を生きてきた。長女として生まれたが「女の子は異性だった」。小学校までは男子と遊び「ガキ大将だった」という。

そんな「少年」の生活は中学生になり一変する。初めてはいれた制服のスカート。毎朝苦痛だった。「胸が大きくなるのもつかうた」。男っぽく振る舞うことではじめられ、女性らしくなる体への嫌悪は強まる一方だった。

体と心の性が一致しているLGB(レスビアン、ゲイ、バイセクシュアル)は、体への違和感はない。だがT(トランスジェンダー)は自分の性が戸籍とは異なると感じている。中でもGIDは治療を求めて医師の診断を受けた人を指し、「間違った体という劣等感」(達也さん)がある。GIDは全国に約4万人との推計もある。

いじめから逃れるため、達也さんは大学までは彼氏を作らなくて無理して女性として生きた。昼間は女性として過ごし、夜は男性として内緒で女性と付き合い「心のバランスを取った」。

34歳のとき、タイで子宮を摘出し乳房を切除した。2004年の法改正で、性別適合手術を受けた場合の戸籍の性別変更は道が開

## 高額な医療費・男女別施設に苦痛 性同一性障害 足りぬ保障

### 生活

「達也さんは体も戸籍も男性になった。僕は自分を変えないと生きていけない。手術後の心身の不調をケアしてくれる生活支援がほしい」と望む。

20年前からGIDの診療を続ける岡山大学ジェンダークリニックの医師でGID学会理事長の中塚幹也教授は「社会の仕組みがGIDがいないものとして作られている。支援を医療から生活へと広げる必要がある」と指摘する。生活する上で困るのはトイレや更衣室、温泉や銭湯など男女別になっている施設だ。

GIDには体は男、心は女の「MTF」と、体は女、心は男の「FTM」がある。特にMTFは性別違和を封じ込めやすく、同大の調査では9割以上が小学生までに親にも伝えず、苦痛を抱えている。

「ヒゲと声変わりが思春期の恐怖で、自殺の原因になることもある」(中塚教授)ため、見た目の支援も必要だ。クリニックでは貸生堂やワコールの職員による化粧や下着の講習会、言語療法士によるボイストレーニングなど生活支援プログラムを用意している。

### ホルモン療法は自己負担

心の性に体を近づけるために、GIDの人の多くは毎月数千円かかるホルモン療法を受けている。男性ホルモン剤は筋肉量を増やし、女性ホルモン剤には乳房が膨らむなどの効果がある。性別適合手術の前から受ける人が多いが、公的医療保険が適用されない。

山形県の飲食店で働くMTFの絢香さん(仮名、26)も男子として扱われる苦痛を閉じ込めてきた。「親には絶対言っちゃいけない」と思って生活していた。男女別になるアールの着替え。それは「違和感どころではなく地獄」。親に告白したのは中学生のとき。「着たくもない着るみる毎日着て生きている感じに耐えられなくなった。高額なホルモン療法と努力で、声も見た目も女性にしか見えない。絢香さんは

実は性別適合手術については4月から保険対象になった。手術は100万円以上かかることもあるが、保険適用なら自己負担は3割。だがGID学会によると10月までに保険適用の手術例は1件しかない。保険診療と自由診療を同じ病名で受ける「混合診療」

は禁止されている。自由診療のホルモン療法をしながら手術を受けると、手術も自己負担になるのだ。手術を望む人は増えていく。GID学会の中塚理事長は「現状ではホルモン療法を断念して健康を害する人が出てきかねない。ホルモン療法への保険適用を急ぐべきことは国も理解している。実現に向けさらに努力したい」としている。

「など柔軟な選択肢がある」とありがたい」と話す。見た目の性別を変えて通称名で暮らす人にとって、行政の書類などに性別や本名を書くことも生きづらさを生む。同会では不要な性別欄の削除を働きかけてきた。17年からはGIDと診断された人は健康保険証に通称を記載できるようになり、性別を裏面に記載できる配慮も認められた。

実は、GID当事者の間でも「男らしく、女らしく生きたい」という性別二元論的な考え方も、性別にとられずに「自分らしく生きたい」という異なる考え方がある。中塚教授は「GIDの問題は特別な問題ではなく、すべての人間の生き方にかかわる根源的な問題。私たちがそうであるように、GIDの中にも多様な性があることを理解することが大事だ」と話す。(大久保潤)

### 社会支援・柔軟な配慮を

「私の中にもともと男性はいない。LGBTやGIDという言葉がなくなるくらい私たちの存在が自然になったらうれしい」と願う。

「g.i.d. j.p日本性同一性障害と共に生きる人々の会」代表でFTMの西野明樹さんは、戸籍は女性だが男性として生活する。「社会の枠組みを変えてほしいわけではない」。例えば「誰でも使えるトイレや空き部屋を更衣室として使



自分らしい表現をするためのメイク講習(岡山大学提供、一部画像を処理しています)

7日付「ほめる働き方改革」の記事中、ユニボスのサービス開始が17年5月とあるのは17年6月の誤りでした。

訂正